

歯科相談から見た大学生の口腔関連の悩みに関する 報告

日野 孝宗^{1, 2)}, 玉元 由香¹⁾, 岩崎代利子¹⁾
小原 勝^{1, 3)}, 日山 亨²⁾, 吉原 正治²⁾

Report on oral cavity-related troubles of university students judged from dental consultations

Takamune Hino^{*1, 2)}, Yuka Tamamoto¹⁾, Yoriko Iwasaki¹⁾
Masaru Ohara^{1, 3)}, Toru Hiyama²⁾, Masaharu Yoshihara²⁾

Key words: university student, dental consultation, oral cavity-related trouble

I. はじめに

大学生活は社会との接点が一層拡大する時期であり、心と身体の健康管理を行うことが大切である。体調不良時、不安や心配がある時など気軽に相談できる場が必要である。大学では学生の心身の健康管理を行う上で、健康診断、診療・応急処置・健康相談、栄養相談、婦人科相談、歯と口の健康相談、メンタルヘルス相談、カウンセリング（人間関係、自分の性格、進路の問題などの悩みについて）などが実施されている。広島大学保健管理センターにおける歯科相談では、歯と口の健康相談として、顎関節症、う蝕症、歯周病、咬合不全、口臭などの口腔全般に関して応じている。さらに大学生への口腔健康に対する意識向上させるための啓発活動の取り組みが必要である。大学生の時期は、口腔のみならずその後の全身の健康

を大きく左右する重要な時期であると考えられるため¹⁾、当センターで行っている啓発活動は極めて重要な意義があると考えられる。

「歯科口腔保健の推進に関する法律」²⁾に次のようなことが示されている。歯科口腔保健の推進に関する施策を総合的に推進するための法律であり、歯科疾患の予防や口腔の健康に関する実態調査をはじめ、国民が定期的に歯科検診を受けること等の勧奨や、障がい者や介護を要する高齢者等が定期的に歯科検診・治療を受けられる施策を講じること、口腔の状態が全身の健康に及ぼす影響の研究、歯科疾患の予防と医療に関する研究を推進する等²⁾の内容となっている。一方、保健福祉動向調査は、国民の保健及び福祉に関する事項について、世帯の面から基礎的な情報を得ることを目的として行われるが、平成11年には、健康な身体づくりの基本的な分野である「歯科保健」を

1) 広島大学歯科診療所
2) 広島大学保健管理センター
3) 広島大学病院口腔総合診療科

1) Hiroshima University Hospital, Dental Clinic
2) Health Service Center, Hiroshima University
3) Department of General Dentistry, Hiroshima University Hospital

テーマとし、国民の歯科疾患の予防の状況、受療の状況、歯科医療に対する要望等について実態及び意識を把握し、今後の歯科保健対策の基礎資料を得ることを目的として実施された³⁾。

「歯科保健」の調査項目には表1に示すものが挙げられている。

本研究では歯科相談で受けた内容の集計を行い、大学生の時期における口腔関連の悩みを分析し、「歯や口の中の悩みや気になること（自覚症状）」についての保健福祉動向調査（歯科保健）の結果と比較検討を行った。大学生の時期に必要なとされる口腔の健康維持・向上ならびに全身の健康への影響に関する問題点を明らかにすることを目的とする。

II. 対象と分析方法

A 大学保健管理センターで歯科相談を受けた大学生を対象として、歯や口の状態に関する悩みの相談内容を分析し、保健福祉動向調査（歯科保健）と照らした検証を行った。

2010年4月から2011年6月の間の約1年間（大学生人数40名）の相談内容を集計した資料（連結不可能匿名化された資料）を本研究では使用した。（倫理審査委員会承認済み 許可番号第E-99号）

III. 結果

1. 男女比

今回対象とした歯科相談を受けた大学生40名の内訳は、男16名（40%）、女24名（60%）で、歯科相談を受けた大学生の中では、女子大学生の割合が高かった。

2. 歯科相談の内訳

歯科相談の内容は大きく分けて3つに分類できる。1. 口に関することでう蝕症などの「痛み」があり相談を受けた者、2. “痛み”は無いが、それ以外の口に関する「悩み」があり相談を受けた者、3. 特に“痛み”や“悩み”は無いが、う蝕症や歯周病等に罹っていないか「チェック」を希望して相談を受けた者、の3つである。その割合では、「痛み」と「チェック希望」は、それぞれ25%、20%と同程度であった。「悩み」は55%と約半数を占めた。

3. 歯科相談の疾患別内訳

歯科相談の内訳は、“悩み”についてのものが最も多かったが、具体的に、歯科疾患に関して分類すると図1のようになった。歯列不正・顎変形症による咬合不全が60%、う蝕症、歯周病につい

表1. 保健福祉動向調査における「歯科保健」の調査項目

「歯科保健」の調査項目（平成11年時）
歯の状態
歯や口の中の悩みや気になること（自覚症状）
歯や歯ぐきの健康のための注意
歯みがきの状況
歯間部清掃用器具の使用状況
歯みがき指導及び歯科健康調査の状況
受療の状況
義歯（入れ歯、ブリッジ）の作製及び使用状況
歯科医療に対する要望
寝たきり等で在宅で介護を要するようになったときに望むサービス
健康意識

てのものが3%，歯科検診的なチェック希望やセカンドオピニオン，口臭が気になる，などのその他が34%であった。歯並び，噛み合わせ，顎関節症状に関するものなどの歯列不正・顎変形症等による咬合不全が大半を占める結果となった。

歯列不正・顎変形症等による咬合不全に関連した歯科相談の内容について，歯列（歯並び）・咬合（噛み合わせ）・顎関節の状況に関するものに分類すると図2のような内訳になった。

4. 保健福祉動向調査（歯科保健）

平成11年の保健福祉動向調査（年齢15歳以上対象）から，一般には歯と歯の間や歯と歯ぐきの上に食べ物が挟まったり，歯がしみたり，歯ぐきから出血があったり，腫れた感じがするなどの悩みが過半数を占める（図3）。一方，大学生の歯科相談で多かった歯列・咬合に係わるものは，口臭に次いで，歯並び，噛み合わせが1割程度であり，全体に対する割合でも“顎の音”を合わせて約4分の1であった。大学生の歯科相談ではほとんど無く，一般で多かった悩みは，口臭の他に，“歯の動揺”，“歯がない”であった。

IV. 考 察

大学生を含む青年期は総体的にみて極めて優れた健康状態にあり，心身の健康管理に心を配ることは容易ではない⁴⁾。しかし，青年期の生活習慣と健康状態には密接な関係があり，不健康な生活行動から心身の不調や疲労感，不定愁訴等を訴える学生が増加しているという報告がなされている⁵⁻⁷⁾。また，青年期における生活行動，生活習慣は次のライフステージである成人期の生活行動，生活習慣，ひいてはその健康に影響するといわれており¹⁾，大学生のこの時期における健康相談を含めた健康教育について考えられなければならない。

大学生の歯科相談内容をみると，“歯の動揺”，“歯がない”についての相談が少なく，歯列・咬合についての相談が多い。歯並び（審美的なもの）についての相談も多かったが，大学生の時期は見た目を気にする割合が高いのではという予想とは異なり，実際には咬むこと，噛み合わせの悩みの方が高かった。これは思春期成長によって顎骨の成長がさらに大きくなり，骨格的な不正咬合によ

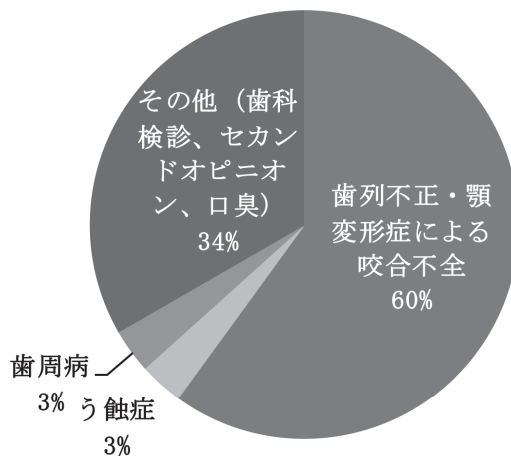


図1. 歯科相談内容を歯科疾患別に分類した場合の割合

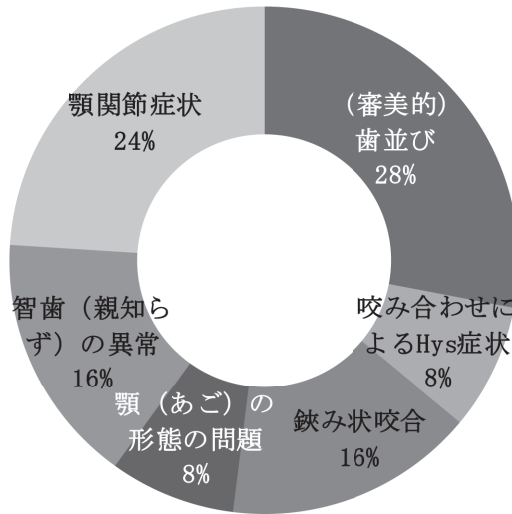


図2. 歯列不正・顎変形症による咬合不全の内訳

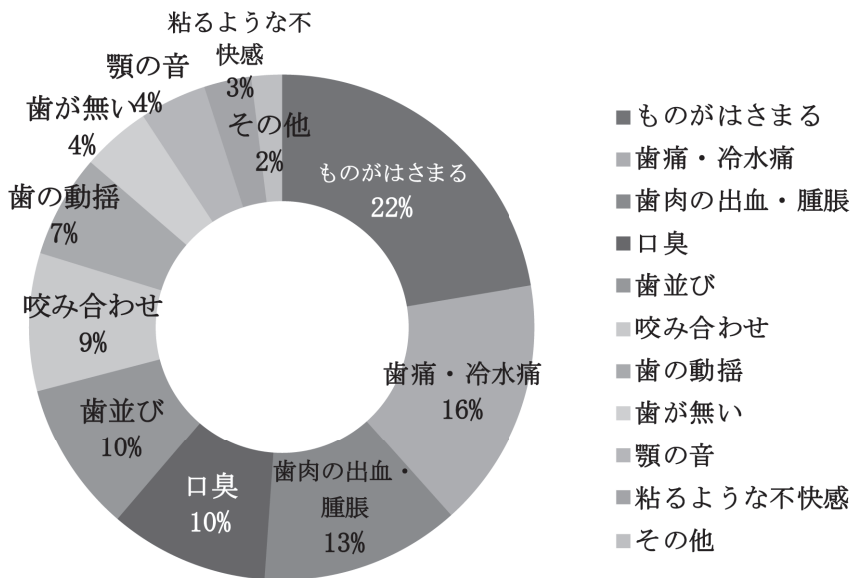


図3. 歯や口のなかに悩み事がある者の内容の内訳 (%) (平成11年保健福祉動向調査改変)

平成11年保健福祉動向調査の1999年の“歯や口のなかに悩み事がある者の内容の推移”全体に対するそれぞれの割合を示したもの。

る機能的負担を与えることとなっている⁸⁾ためと考えられる。このように歯や口の中の悩みや気になること（自覚症状）に関して、歯列不正、咬合、顎関節に係わるもの、特に咬み合わせに対する関心が、大学生の時期で、その前後の期間（幼児期、学童期、青年期を除く成人期、中年期、老年期）よりも高いと考えられた。これは、永久歯歯列完成や智歯萌出完了時期（20～26歳）に連動し、この大学生の時に歯列不正、咬合、顎関節に係わる問題が顕著になるためと思われる。症状、口腔の状態によっては医療機関において詳しい検査を受け、治療を開始する必要がある、大学生の時期に、歯や口の悩みを相談する機会、あるいは歯の健診を受けるシステムがあることは有用と思われる。

昭和32年から6年ごとに行われている歯科疾患実態調査では、平成17年実施分までの調査項目が、う蝕症、歯周病やその罹患率、処置済歯、未処置歯、歯の残存である⁹⁾。平成23年実施分から、咬み合わせ（左右で噛めるか）、顎関節の雑音を自覚する者の割合、顎関節の痛みを自覚する者の割合、など咬合、顎関節に関する事項が追加されている（表2）。

追加項目の中で、大学生の時期を含む、15～19歳と20～24歳における、“顎関節の雑音の有無”または“顎関節の痛み”について、平成23年の歯

科疾患実態調査結果は、それぞれ約20%、約8%（計約28%）である¹⁰⁾。4人に1人は顎関節に何らかの症状をもっていることになる。一方、本研究における大学生の歯科相談での顎関節症状に関する悩みの割合は全体に対して14.4%（図1および図2）であり、平成23年の歯科疾患実態調査の約2分の1の割合である。つまり、顎関節についての悩みや気になることと、実際の顎関節の症状を有する割合は一致しておらず、顎関節症状に自覚の無い場合を含め、実体はもっと多いことが推察される。大学生の歯科相談調査から見た口腔関連の悩みでは、歯列不正・顎変形症による咬合不全についてものが大半を占めることが示された。咬合・歯列不正、顎関節症の問題は、口腔の重要な役割である摂食、会話といった生活において極めて重要な機能に影響を及ぼす。これらは、いずれも噛めない、食べられない、見た目が気になる、人目が気になる（審美的問題）、会話に支障があるなど、慢性的な精神的ストレスへと繋がる。

口腔の2大疾患であるう蝕症や歯周病では、歯ぐきの腫れ、出血、口臭、歯の痛み（進行程度によっては、これら2大疾患も噛めない、見た目が気になる）という問題が生じるが、歯科治療の観点から捉えると、これらの疾患は比較的短期での治癒あるいは機能的回復が望める。しかしながら、歯列不正や顎変形症等、咬合不全や審美的問

表2. 歯科疾患実態調査に追加された主な項目

歯科疾患実態調査項目（平成23年時の主な追加分）
・ 叢生の有無
・ 空隙（欠損歯）の有無
・ オーバージェット
・ オーバーバイト
・ フッ化物塗布の有無
・ 顎関節の雑音の有無
・ 顎関節の痛み
・ インプラントの有無
・ 咬み合わせ（左右で噛めるか）
その他

題,あるいは顎関節症に対する治療は,長期間を要する。治療期間は,開始時期の年齢によっても変わるが,永久歯列が完成する,または智歯の萌出完了(歯根完成)の20~26歳の時期までが,比較的短い治療期間での改善が望めると考えられる¹¹⁻¹³⁾。このため,大学生の時期に咬合・歯列不正や顎関節症への不安・問題に対して,歯科相談や歯科健診,啓蒙活動等を行わず放置しておくことは,改善の必要性を知る最適な時期を逃すことになり,口腔の悩みからくる精神的ストレスを抱えたまま,その後の人生を歩むことになるかと推察される。

今後,大学生の積極的な歯科健診受診,歯科相談室利用の意識・関心を高めるための口腔保健に関する啓蒙活動等を通して,大学生の歯や口の中の悩みや気になることに関する事象の経年的推移,生活行動や全身体的な健康状態との関連について詳細な分析が必要である。

V. まとめ

本研究では,咬合・歯列不正や顎関節症に関する悩みが大半を占めていた。また,口腔保健に関する啓蒙活動等を通して歯科健診や歯科相談室の利用を促し,大学生の口腔関連の悩みを経年的に調査していく必要があると考えられた。

文献

- 1) 北山敏和, 勝野真吾: ライフスタイル教育の発展と保健体育改革への期待 (I) ライフスタイル教育: 学校保健体育への新たな視点. 学校保健研究, 33, 393-397, 1991.
- 2) 歯科口腔保健の推進に関する法律, 総務省法令データ提供システム, 行政法, 歯科口腔保健法, (平成23年8月10日法律第95号) .
- 3) 保健福祉動向調査 平成11年(歯科保健) 厚生省大臣官房統計情報部保健社会統計課国民生活基礎調査室 厚生統計協会 2001/02/06.
- 4) 池田順子, 森忠三: 女子学生の食生活とライフスタイルに対する介入研究. 小児保健研究, 56(5), 644-654, 1997.
- 5) 鈴木雅子, 三谷瑋子: 学生における食生活と

- 健康状態との関連性. 栄養学雑誌, 37(2), 69-74, 1979.
- 6) 善福正夫, 川田智恵子: 学生における健康習慣と主観的健康状態の関連性に関する研究. 学校保健研究, 39, 325-332, 1997.
 - 7) 徳永幹雄, 橋本公雄: 青少年の生活習慣が健康度評価に及ぼす影響. 健康科学, 24, 39-46, 2002.
 - 8) 有本博英, 覚道健治: 歯科矯正治療における技術革新と顎変形症治療におけるパラダイムシフト, 日顎変形誌, 24(4): 285-297, 2014.
 - 9) 歯科疾患実態調査報告解析検討委員会編: 平成17年歯科疾患実態調査, 財団法人, 口腔保健協会, 東京, 2007, pp 54-63.
 - 10) 厚生労働省: 統計情報・白書, 各種統計調書, 厚生労働統計一覧 健康(健康増進), 平成23年歯科疾患実態調査, 厚生労働省ホームページ, <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/62-17.html>>, (平成27年11月18日現在) .
 - 11) Frank, V. H.: Paresthesia: evaluation of 16 cases. J. Oral Surg. 17: 27-33, 1959.
 - 12) 湯浅秀道, 河合俊彦, 尾澤陽子, 他: 下顎埋伏智歯抜歯の臨床的検討, 日本口腔外科学会雑誌, 38(7): 1163-1166, 1992.
 - 13) 日本口腔外科学会: 顎変形症診療ガイドライン, <https://www.jsoms.or.jp/pdf/mg_jd20080804.pdf>, (平成29年1月5日現在) .